

伝統を訪ねる

WAVE KANSAI

WAVE KANSAI

ウェーブ関西

大阪から日本・世界が見える

## 紀行「鎖国」を解く

④

大和川の付け替えが経済構造の転換を推し進める契機になったことは語る述べてきた通りだ。日本経済の性格が全体として自給経済から商品経済に変わっていくのだが、その過程で一般には付け替えによって新川筋の堺が大打撃を受けたと受け止められている。川の土砂で港が埋まり、中世以来の貿易都市は衰退の道をたどったというのだ。が、果たしてそうだろうか。

堺市博物館学芸員の矢内一磨さんは、通説を疑問視する。「付け替えは洪水をもたらし、港湾機能を損なった」とは間違いないにしても負のイメージがあまりにも強すぎる。堺は伝統的な物づくりの



港は大和川が運ぶ土砂で埋もれてきた(堺市の旧港)

末まで四、五万人台で推移したという。この水準は「三都」は別格として十万人の金沢、名古屋に次いで鹿児島、仙台、広島といった大藩の城下町と肩を並べる。

これだけの人口を養うには一定の経済力が必要とされるが、それが伝統的な物づくりの技術だった。元禄初期に農業革命をもたらした「稲こき千曲」の発明のように鉄砲鍛冶(かじ)の流れをくむ金属

れた。繰り綿の先物取引所が堺に誕生したことは、河内や大和の実綿の集荷地だった平野郷、榎津や河内、播磨など瀬戸内の実綿を一手に扱った大坂と並んで、堺が和泉の実綿取引の中心だったことを裏づける。

三会所は十数年後、榎河泉の綿作農民や在郷商人が綿の値下がりの原因になっているとして廃止運動を起すが、その際に榎津や河内が大坂と平野郷の会所、和泉が堺のそれをターゲットにした。それだけ和泉木綿の取引で堺に影響があったのである。

こうした事実から付け替えで堺が衰退したとする通説は根拠に乏しいことが分かる。ただ、そうであっても幕府は付け替えが堺に打撃を与えることは想定内の範囲内だった。

「経済首都として大坂の一端集中を意図した」(大阪歴史調査会の荒武賢一朗さん)

幕府は、積極的に事業を推進し、思惑通りそれまで。堺経済圏に属していた八尾や松原、狭山などが付け替えを機に大坂シフトしている。

少し語弊はあるが、江戸期の堺は大坂の拡大とともにその陰として役割を果たすよう宿命づけられたといえるのではないか。その遠因は、付け替えより百年以上も前、秀吉の手による大坂の第三期都市計画にあるだろう。

秀吉は当初、堺を大坂の外港と位置づけて南北に長い都市の建設を考えていたが、畿内が大きな被害を受けた伏見大地震で方向転換。多額の復興資金を要する南の堺を捨て天満、船場を整備する東西軸に切り替えた。その構想は、松平忠明による元和期の大阪戦災復興プロセス、すなわち「天下の台所」大坂の基盤整備に引き継がれたのである。

(編集委員 脇本祐一)

## 産業革命(10)

### 堺、物づくりの町で活路

いせず、暮らしぶりは質素で世間つき合いも上手だが、一獲千金の気概に欠けて老成した印象を与える。

つまり、一般にイメージされる、勘合貿易や朱印船貿易で海外に雄飛した黄金の日々の面影は、付け替えのはるか前に失われていたのだ。

海外貿易や自由都市とは違いう、あくまで幕藩体制の中で経済的に安定した成熟都市の道をたどったといえる。

それは、一つには人口規模に表れている。元禄年間の六万三千人をピークに、付け替え後の享保十三年(一七二八年)が五万三千人。その後幕

加工のほか食品加工、染織などに強い競争力を持った。それぞれの産業分野で細かな分業体制がとられ、分業化は高い専門性をもたらした。

もう一つが先物取引の「繰綿延売買会所」の設立である。大坂、平野郷に先がけて宝暦九年(一七五九年)に認可さ